

研究課題	地域・行政・学校の3者が連携した地域活性化の取り組みの実践
副題	～地区紹介ビデオの制作を核に、高校生が地域に根つき「にぎわい」を取り戻す起爆剤になることをめざす～
キーワード	地域創生・映像・映像配信・官学地域連携
学校/団体名	三重県立神戸高等学校
所在地	〒513-0801 三重県鈴鹿市神戸四丁目1-80
ホームページ	<a href="https://kambe.ed.jp/">https://kambe.ed.jp/</a>

## 1. 研究の背景

本校は、2020年に創立百周年を迎えた地域の伝統校である。普通科と理数科が設置され、全校生徒960人が文武両道を目指して日々勉学やクラブ活動に取り組んでいる。

2022年度に始まる新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の実現がうたわれている。社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくことが求められている。これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいく必要がある。特に、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させていくことを求めている。

## 2. 研究の目的

本校は、多くの卒業生を輩出し、市内はもとよりさまざまな分野で活躍している。特に、地域を支える立場で自治会役員や市役所職員が多く、学校との連携を模索する動きがある。本実践では、新学習指導要領の趣旨を鑑み、鈴鹿市内の「地域づくり協議会」と連携し、若い世代が地域社会に参画し、どのようなことができ、それが地域にどうプラスになるかを実践し、他地域へ広げるときのモデル化を模索するものである。

## 3. 研究の経過

本校放送部が中心になり、加佐登地区まちづくり協議会と協働で実践に取り組んだ。加佐登地区のよさを住民に再発見してもらうことを目的として、「地区紹介ビデオ」を制作、3年間で10本程度の映像作品をつくって住民に見てもらう。中長期的には、地域づくりの担い手を増やしたり、新しい住民を受け入れたりすることを狙う。

## 4. 代表的な実践

大きく3つの取り組みを行った。1つめは、実践の核となる「地区紹介ビデオ」の制作である。2つ目は、実践を円滑に進行するために、本校、加佐登地区まちづくり協議会、鈴鹿市の3者による官学地域連携「2023 加佐登まちづくり活性化施策広報プロジェクト」の締結である。3つ

目は、この連携協定締結を記念した催しの開催である。これは、地域住民に周知するとともに、本校が全校規模で関わるきっかけとなることを狙った。

#### 4-1. 地区紹介ビデオ

本実践の核となる「地区紹介ビデオ」の制作を放送部が中心になり、クラブ活動時間帯を活用して行った。

公開時期	ジャンル	話題
2020年11月	地域のイベント	広瀬町のかんこ踊り(2020年8月)
2021年3月	地域のイベント	しめ縄教室(2020年12月)
2021年5月(予定)	地域の人	(未定)
2020年11月	—	官学地域連携協定調印式(2020年7月)

《表》地区紹介ビデオ題材一覧

##### 4-1-1. 広瀬町のかんこ踊り

400年あまり続く、五穀豊穡を願う、広瀬町のかんこ踊りを取材した。

かんこ踊りの起源は天正年間(1573年～1592年)。雨乞いの太鼓踊りを神に奉納したことに始まっている。短い丈の浴衣を使用し、頭に花笠をかぶって踊る。かんこ踊りは市内9か所に伝承されているが、広瀬町のかんこ踊りもそのひとつであり、市指定の無形民俗文化財(昭和49年)。



取材生徒は、ディレクター1人、撮影2人の計3人。かんこ踊りの実施、継承に取り組む保存会の会長を主な取材対象とし、インタビューを行った。また、資料映像用として、本番2週間ほど前に準備物の制作の様子を取材、また完成したものの撮影を行った。

取材は、前日行事からスタート、本番当日も祭りの一部始終を撮影した。かんこ踊りを長年見てきた住民に話を聞いた。後継者不足の問題があるものの、地域住民はこのかんこ踊りを季節の行事として大切に守ってきていることが伝わってきた。

コロナ禍での実施にあたっては、参加者を地域住民に限定、手指消毒やマスク着用、検温など対策を施して実施した。参加者は例年の3割ながら、伝統行事を絶やさないと住民の思いを感じた。

完成した映像番組は、後述の「加佐登地区まちづくり協議会活性化プロジェクト発足記念コンサート」で放映、会場や動画配信サイト上で地元住民をはじめ多くの方に見ていただき、連携協

定の成果を初めて披露することができた。

#### 4-1-2. しめ縄教室

加佐登地区まちづくり協議会が毎年12月に開催しているしめ縄教室取材した。生徒は、ディレクター1人、撮影2人の計3人。しめ縄づくりを長年行ってきた住民が中心になってグループを作り、申込者約20人に指導した。中心となる住民と参加住民に話を聞いた。取材を通して、しめ縄教室で住民同士の新たなつながりができていることがわかり、そのことを「地区紹介ビデオ」でも取り上げている。



別日には、地元の白鳥中学校の生徒5人にも、同じメンバーがしめ縄づくりを指導した。完成後は、加佐登神社へ移動、宮司に祈禱をしていただいた。しめ縄づくりから祈禱までの一連の流れを撮影、また生徒に話を聞いた。

どの地域でも行っている催しではないものを題材にし、加佐登地域ならではの魅力を発信していきたいと考える。

#### 4-2. 官学地域連携「2023 加佐登まちづくり活性化施策広報プロジェクト」

加佐登地区まちづくり協議会、鈴鹿市、本校の3者で、加佐登地域の活性化、鈴鹿市全体の活性化を狙って連携協定を締結した。3者が密に連携することで活性化が促進できることを狙って行った。

発端は、2019年11月に、加佐登地区まちづくり協議会からまちのよさを住民が再発見できるよう、映像制作の依頼があったことである。このとき、1回だけの映像制作ではなく、テーマや分野ごとに複数年で制作する提案を行った。その目的は次の2点である。



- ・回を重ねるごとに、住民の活性化機運を高まる。
- ・学校と地域だけでなく、その枠組みに市も加わることで取り組みの助言を得る。

基本的なスキームを構築するため、12月より3者連絡会を立ち上げ、方針の共有や住民への周知方法などの検討を月1回程度のペースで行った。連携協定の締結は当初2020年4月を計画

したが、コロナ禍で7月にずれ込んだ。

2019年11月28日	協働の申し込み	地区紹介ビデオの制作を1年間で行う。
2019年12月5日	第1回会合 (加佐登公民館)	地区紹介ビデオの制作を3年間継続して行う。1本10分、年間3本程度。郷土(自然、歴史など)、イベント、人の3分野。鈴鹿市総合計画2023とも連動。
2020年1月27日	第2回会合 (神戸高等学校)	地区紹介ビデオの具体的な内容。助成金申請。地域計画への反映。鈴鹿市が協働にどう関わるか。3者連絡会として月1回ペースで情報共有を行うことを確認。開催場所は持ち回り。
2020年2月27日	第3回3者連絡会 (鈴鹿市役所)	協働プロジェクトにおける3者の関係性整理。セレモニーの開催時期と内容。本校放送部のラジオ番組との連動検討。助成金申請。
2020年3月27日	第4回3者連絡会 (加佐登公民館)	地区紹介ビデオの題材検討。セレモニーの検討。
2020年6月16日	第5回3者連絡会 (加佐登公民館)	セレモニーとフェスティバルの開催検討、内容の確認。
2020年7月2日	第6回3者連絡会 (神戸高等学校)	調印式(セレモニー)の最終調整、地区紹介ビデオの題材検討

《表》3者連絡会開催一覧(2019年11月～2020年7月)

#### 4-3. 加佐登地区まちづくり協議会活性化プロジェクト発足記念コンサート

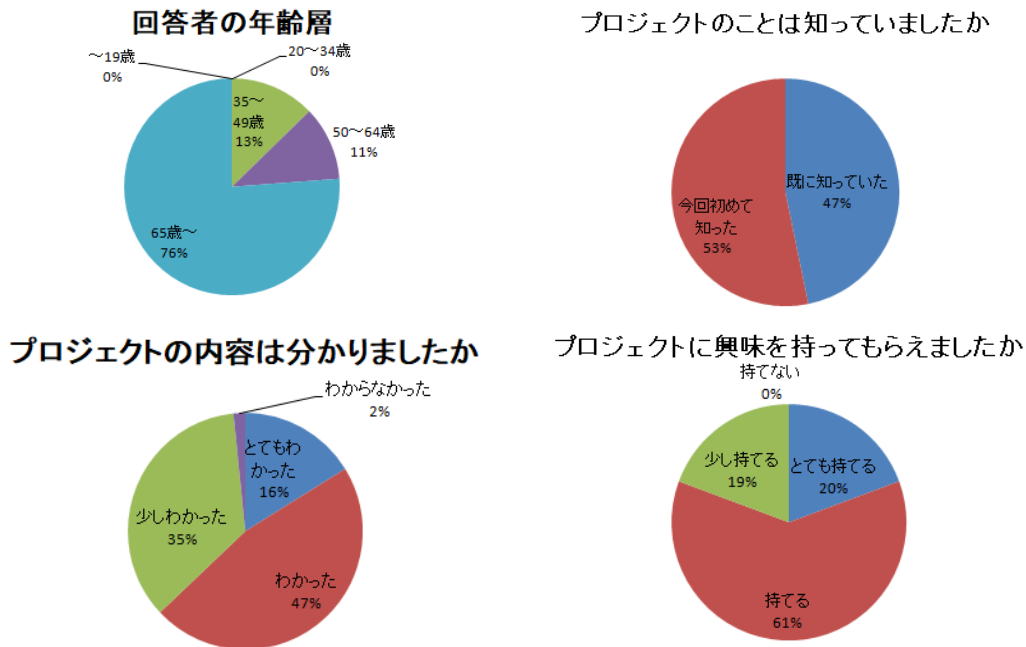
官学地域連携の締結は、コロナ禍で住民への周知ができず、地域として盛り上げる仕掛けが必要であった。そこで、連携協定締結を地域住民に周知することを目的に、「加佐登地区まちづくり協議会活性化プロジェクト発足記念コンサート」を企画、2020年11月に鈴鹿市立加佐登小学校の体育館をお借りして開催した。

コロナ禍のため、会場への入場制限(70人程度)を行い、事前申し込み制とした。気軽にコンサートに参加してもらえるよう、YouTubeによるライブ配信を行い、約200人(後日視聴も含む)に視聴していただいた。現役世代の参加は少なく、この点は今後の課題になった。また、加佐登地域の人口5,150人(2020年12月末)に対する視聴率は5.2%であることから、どのように地域ぐるみで取り組みを展開していけるかは今後の課題である。



## 5. 研究の成果

本実践の「地区紹介ビデオ」の地域住民の反応はおおむね良好である。2020年11月に実施した「加佐登地区まちづくり協議会活性化プロジェクト発足記念コンサート」の来場者アンケートの結果を以下に示す(有効回答数 63)。



高校生など若年層が地域社会に関わることに、地域住民は期待していることがわかる。連携の核となる地区紹介ビデオについても地域住民は期待していることがわかる。地区紹介ビデオ第1弾や7月の連携協定調印式の様子を放映したことで、これからの展開をイメージしてもらいやすかったと推測できる。本来、こうしたアンケートは地区紹介ビデオを公開するたびに行う計画であったが、コロナ禍に伴って制作が遅れていることから複数回の実施には至っていない。

本実践では連携の中心を放送部としたが、これを全校規模に広げていくことが重要であると考える。

## 6. 今後の展望

2020年度は、コロナ禍での活動となり、計画どおりに「地区紹介ビデオ」の制作が進まなかった。計画では年3本程度を見込んでいたが、2021年度においてもこのペースで新たな題材を設定し、制作を継続したい。

### ①. 視聴者層の拡大

計画当初は「地区紹介ビデオ」として、加佐登地域の住民が主な視聴者層であった。地域のよさを再発見してもらうことを主眼において制作を行っている。こうした映像作品が複数完成すると、次の段階として地域外の人に見てもらえる可能性が出てくる。その1つの手段として、YouTubeでの配信があげられる。昨年11月のコンサートで配信実績がある。取材対象者に対す

る許諾を改めて得る必要はあるが、地域外へのアプローチという新たな活用も模索したい。

## ②. 他地域への拡大

いわゆる「加佐登モデル」として、一連の取り組みを市内の他の地域づくり協議会との連携で拡大していくことも可能である。連携協定のメリットを前面に出しつつ、どう活性化したかを数値化していく必要がある。

## 7. おわりに

本実践を始めるにあたって、生徒に育みたい力を3つあげ、取り組みを継続してきた。

1つめは、情報活用能力である。地域や学校で、さまざまな人と関わり、取材を通じて情報を集めた。限られた番組時間のなかで、そのすべてを伝えることは難しい。取材していくなかで、取材対象者の一番の思いがどこにあるのかを判断し、それをどのような形(インタビュー、ナレーション等)で視聴者に伝えていくのかを生徒が考え、選択する力がついたと考える。

2つ目は、地域活性化に関わる力である。近年、若い世代が地域のコミュニティに関わるものが少なくなっている。その原因は複数考えられるが、若い世代が地域に関わるきっかけがなかったり、自身が住む地域のことをよく知らなかったりすることがあげられる。地区紹介ビデオの制作によって生徒が地域の人や文化に関わるきっかけを作った。普段話す機会のない人と接することで、地域の人や文化への理解が深めることができた。

3つ目は、課題発見能力である。地域の人や文化に関わっていくうちに、それぞれの地域が抱える課題に気づくことを狙った。しかし、制作本数がまだ少なく、この点に至っていないのが現状である。継続して取り組んでいく必要がある。

2022年度からはじまる新学習指導要領では、社会に開かれた学校づくりが重要視されている。本実践では、特定の地域と密に連携を取り、「地域活性化」を主たるキーワードに、若い世代がどのように地域に関わるのがよいかを探ってきた。いわゆる「加佐登モデル」の構築である。加佐登モデルの他地域での応用も考えながら、生徒が社会と関わることのメリットを感じ、長期的な視点で主権者としてどのように関わっていけばよいか考えるきっかけになることを期待している。一方で、限られた活動時間で最大限の効果を得る方法を模索しながら持続可能な仕組みづくりを行う必要がある。

本実践が、若年層による地域活性化の1つのモデルになることを望むとともに、引き続き多くの方のお力添えをいただきたいと考える。